

# Peace Wave

## Okinawa Peace Assistance Center

特定非営利活動法人  
沖縄平和協力センター(OPAC)  
沖縄県那覇市久茂地 3-15-9 アルテビル那覇  
TEL (098) 866-4635/FAX (098) 866-4638  
[www.namcle.com/opac](http://www.namcle.com/opac)



OPACのロゴマーク  
沖縄を飛び出し世界の  
現場で活躍することを  
イメージしました

### 沖縄の心を具体的な行動に Transforming Okinawa's Heart into Action

### 2004.Feb.1 No.5

## アフガニスタン地雷問題の現状

国連アフガニスタン地雷対策センター  
久保 拓人

アフガニスタンは世界でも有数の地雷・不発弾の埋蔵国であり、2003年度に国際赤十字委員会(ICRC)に報告された被害者数は1,287名でした。ひと月に100人から200人の被害者が出ています。しかし、情報インフラはもちろんなく、治安等の関係で立ち入れない地域も多いこの国では、被害者数の把握はICRCに登録している病院からの報告に頼っているのが現状で、病院に着く前に亡くなってしまふ場合や、病院まで数日かかる地域では、地元の簡易クリニックのようなところで手当てを受けることも多いため、被害者数の正確な把握がなされているとはいえません。

アフガニスタンでは国連の主導のもと、20人の外国人と7,600人のアフガニスタン人により地雷対策が実施されており、地雷除去や地雷回避教育を行っています。地雷回避教育を何度も受けたことがあり、地雷の怖さも知っているにもかかわらず、家族を養うために地雷原に入った、と語る被害者もいます。被害者からの聞き取り調査によると、遊んでいる子供が不発弾をおもちゃ代わりにして爆発した例や、地雷や不発弾に使われている金属や火薬がわずかなお金になるため、分解している最中に被害にあった例がかなり多く報告されています。

アフガニスタンにおける地雷や不発弾被害を減らすためには、迅速な地雷除去活動と効果的な地雷回避教育のほかに、アフガニスタン人が職を持ち収入が得られるようになるために経済復興が不可欠です。この例だけをとり、復興支援や平和構築を実施するにはある特定分野に対する支援だけでは不十分で、さまざまな要素が考慮される必要があるのは明らかだと思います。

平和構築・アフガニスタン  
NGOこの人に聞きたい・平田太一さん  
特集「沖縄から東ティモールに何ができるか」中  
行っちゃいました東ティモール  
東アジアの奇跡/キーワード・ミサイル防衛  
サイバール軍事知識/OPACスタッフ紹介



▲女の子を対象に地雷回避教育(カブールの国内避難民キャンプ)

## アフガニスタン平和構築 ～和平と復興の歪な関係～

OPAC事務局長・主任研究員

上杉 勇司



### アフガニスタンの現状

—アフガニスタンの首都カブールは、日本の戦国時代の室町幕府や朝廷のような存在である—このたとえが適切かどうかは定かではないが、少なくとも現在のアフガニスタンは、カブールの実権が地方まで及んでおらず、和平プロセスが閉塞状況に陥っている。南部では、アフガニスタンの平和構築とは無関係に、米軍によるアルカイダの掃討作戦が依然として続けられている。治安状況はもと悪く、地域によってはさらに後退しており、皮肉にも「新しい原理主義」が芽生える土壌が形成されつつある。NATO 軍主導の国際治安部隊がにらみをきかせているカブールでは、各勢力は表面的にはおとなしくしており、あからさまに反旗を翻す勢力はない。しかし、軍閥間での和解や民族間での権力共有の合意も実現できていない現状では、国土全体を実効支配するような中央政府の確立も不透明であり、中央での権力闘争も日に日に激化している。自らの躍進に固執する軍閥と安寧を求める民衆の間には乖離（かいり）も指摘されるが、軍閥の武装解除が進まないなか、銃による支配がはびこる実力社会の構図を変えられるほどの力は民衆にはない。

### 「見せかけの平和」を定着させてもよいか

アフガニスタンの平和構築の「和平プロセス」と「復興プロセス」の両輪を支える国連は、短期的な成果の実現を最優先に、2年半のタイムテーブルにそって、支援を行ってきた。2003年12月に憲法の策定作業が終わり、2004年6月には大統領選挙の実施が予定されている。しかし、民族対立は解消されず、軍閥の権力闘争が続くような状況で、アフガニスタンの和平プロセスは健全な方向に進んでいるとはいえない。だとすれば、内実がともなわない「見せかけの平和」を定着させてしまうことになりかねないのではないだろうか。

もちろんこのような状況下でも、アフガニスタンの物理的な復興を促すような緊急援助は必要である。かんがい設備の整備や医療支援の提供などは、多くの人々の生活の向上に役立つであろう。しかし、このまま復興プロセスの先走りが目立つようになると、実権を握る軍閥に資する復興支援が優先され、民衆が益する復興支援がなおざりにされる恐れがある。

たとえば、今回復興の目玉となっている主要都市を結ぶ環状幹線道の建設によって、国内輸送が容易になるとともに、中央アジアとアラビア海を結ぶ交通の要衝としてのアフガニスタンの国際的な価値も高まるに違いない。しかし、軍閥による群雄割拠が続くなかでの回廊建設か

ら得られる実益は、各軍閥の軍資金に化けるであろう。つまり、和解を飛び越した復興は、もろ刃の剣でもあり、政治的な安定を脅かすことにつながりかねない。軍事の論理が優先された復興が、将来のアフガニスタンの発展の足かせになることは、米軍主導で戦後復興を遂げた沖縄の経験が示唆している。

### 復興支援は和平プロセスを支えるもの

和平プロセスと復興プロセスは車の両輪のようなもので、双方がバランスよく進展していかないと平和の定着はおぼつかない。復興プロセスのみが突出し、和平プロセスが停滞していると「平和構築」という名の車はその場をぐるぐる回るだけになってしまう。理想的には、復興プロセスが和平プロセスの進展を支援するにはたらくことが望ましい。

民衆が復興の労役を提供するばかりでなく、真の受益者となるように、国際社会は復興支援と同時に和平プロセスに対する支援にもっと力を入れるべきである。銃による支配から法による支配への移行を促さない限り、民衆が復興の主役にはならない。

### ○参考文献 アフガニスタンを知る3冊

川端清隆『アフガニスタン 国連和平活動と地域紛争』  
みすず書房、2002年

わが国には、アフガン紛争の実情に関して書かれた本は少ない。特に鳥瞰的な視座から、国際社会がアフガン紛争やその和平に向けてどのような努力や不誠実を積み重ねてきたのかを論じる本は非常に限られている。もちろん、現地で人道支援を続け、この「忘れ去られた国」の実情を訴えてきた中村哲医師による重要な書籍が何冊もあるが、これらは紛争の犠牲者である一般民衆とともに歩む草の根 NGO の「虫瞰的」な視点から書かれたものであり、国際政治の荒波のなかで、各国の思惑や政策がアフガンの運命に及ぼした影響について多くを知ることはできない。その点、本書では、国連職員としてアフガン和平にかかわった筆者が、アフガンの紛争とその和平交渉をめぐる当事者、超大国や周辺諸国の駆け引きの内実を、国連の立場や視点から描き出している。ハイレベルな外交交渉や軍事・戦略的な考察を交えながら、仲介者の立場でムジャヒディン（イスラム聖戦士として80年代ソ連の軍事介入に抵抗した）やタリバンの間を奔走した国連による和平努力が克明につづられており、本書は、国際協調に基づいて国連が主導する和平プロセスの限界と可能性を知るうえで大変参考になる。しかし、アフガン和平プロセスの、より正確で包括的な理解を促すためには、国連による和平努力の問題点の考察も必要であるし、ハイレベルな交渉だけでなく各勢力内部の力学などについての検証を補う必要があるように感じられた。

金成浩『アフガン戦争の真実 米ソ冷戦下の小国の悲劇』  
NHKブックス、2002年

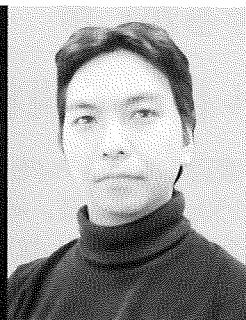
泥沼化したアフガン内戦の起源を、冷戦下の米ソ対立の文脈で権力政治に求め、超大国の思惑に翻弄された小国の悲劇が外交資料をもとに克明に描かれている。

広瀬崇子、堀本武功編  
『アフガニスタン 南西アジア情勢を読みとく』  
明石書店、2002年

11名の地域研究者が、アフガン問題の現状を正確に理解するための道筋を、歴史と地政学的視点から提供する。超大国と同様に、アフガン内戦に深く介入した周辺国の視点が有益だ。

NGO

この人に聞きたい

第3回  
平田大一さん

▶シリーズ第3回は、本誌で連載中の『やんばるの森から』の一文詩を担当されている南島詩人、平田大一さんにお話をうかがいました。平田さんは、その独自の感性で舞台、音楽と様々な場で創作活動に励んでいます。すべての活動が地域に根付いており、勝連町では住民を巻き込んでの町おこしを成功させています。そのほかにも、学校で講演活動を行うなど青少年の育成にも力を入れており、作品同様に力強い瞳と声、そして人をひきつける不思議な力を持っています。今回は南島詩人としての創作の過程から、地域振興についてうかがいました。

ひらた・だいいち／1968年小浜島(沖縄県)生まれ。学生時代より、詩作・朗読を中心とした創作活動を展開。2001年より勝連町きむたかホール初代館長に就任。現在、演出を手がけている舞台「肝高の阿麻和利」が県内外で評価されている。

### —南島詩人という名前の由来は。

大学に入って、詩を書き始めました。島を遠くから思う内容の詩が多く、いわゆる島と都会の狭間に揺れるアイデンティティの揺らぎが僕の詩の世界で、南の島をうたうという意味で南島詩人と名付けました。また、誰もが詩人、表現者、天文学者、そして哲学者であるということが、僕の考える島人(しまんちゅ)で、一流の島人イコール詩人であるということが信念なので、一流の島人への憧れからそのように名付けました。

### —どのようにして詩が出来上がるのですか。

詩は写真と同じだと思います。どうしても残しておきたいシーン、例えば夕日が綺麗だといった、とても感動したシーンを写真に残すじゃないですか。心のシャッターを切るような気持ちで詩は書くべきだと思います。だから、自分の中で忘れたくない思いを短い日記を書くように、その都度ストレートに綴っています。

今回の保坂さんとの仕事(本誌『やんばるの森から』)も、ある意味バトルであり、ある意味では対話だと思います。非常に面白いですね。

### —作品一つ一つに託された思いとは。

僕は島哲学と呼んでいますが、どこか外にあるものではなく、この島になにげなくあるものに哲学性を見出します。哲学というのは難しい理論ではなく、これだけは守らなければいけないという、自分の中の生きざまのようなものだと思います。だから僕の中で創られる言葉というものは、自分に対する挑戦状であり、今島で生まれ、島で生きている人たちへの挑戦状でもあります。僕が自分自身に対して送るメッセージに誰かが共感してくれるのであれば、詩が作品として成立しているのだと思います。

### —次々に新しいことに挑戦していますが、そのアイデアはどこから湧くのでしょうか。

人と出会うことです。自分の中で自らの思いを深く掘り下げることも大事ですが、「根っこを張る」と同時に、「空に解き放つ」という作業も同時に行われているのだと思います。葉っぱが伸びた先で風に出会うように、やっぱり出会いの中で教わることはいっぱいあります。そのためにも、閉鎖的にならず、常にオープンにいろいろな人と出会うことが大切です。人と出会うということはまだ知らない自分自身に出会うということでもあり、そのチャンスがあるということです。人と話しをする中で、アイデアをもらったり、次のビジョンがうまれてきます。詩人というのは自分の世界を大切にするものですが、自分の世界を大切にこそ、

人の世界も認めてあげられる詩人でありたいという希望をこめて南島詩人は存在しています。

### —アフガンより青年たちが来沖しますが、沖縄で何が学べると思われますか。

沖縄のよさは地域力だと思います。地域で子どもを育てる力があります。いい意味で地域が独自の力をもっているのです。だから、自分たちの地域で子どもたちを教育していく力を沖縄の事例から考えられたらいいですね。経済復興も大切ですが、やっぱり人づくりが一番重要です。そのためには、沖縄でも同じことが言えますが、子どもたちの感動体験をいっぱい用意してもらいたいと思います。子どもの頃の感動体験が豊かな大人をつくるでしょう。

### —現在、日本では国際協力に携わりたいと考える若者が増えてきていますが。

自分の生まれた町のことをもっと深く勉強してほしいですね。自分の生まれた国のことを知らずに海外へでも観光客にしかならないと思います。外にでるとアイデンティティ、根っこを問われる場面に遭遇します。僕は笛や三味線、太鼓や自分の島の歌をうたうことができます。そのおかげで、インドネシアや中国をまわったときには、自分自身をもう一度見つめなおす作業ができ、相手の国の文化を受け入れることができました。せめぎ合いの文化のなかで、気持ちが通いあう方法も文化であり、心と心です。そのためにも、自分の生まれた地域のことをもっとよく知ること、自分の根っこがしをしてほしいと思います。おそらく多くの人が外に出て、自分の生まれた地域や島や国のことを考えると、そういう面ではいいきっかけになるかもしれませんが、その前にしっかり勉強をして行けば深く関わりあいが持てる可能性があります。異文化を知り、「人間一つになんてなれない」と感じてはじめて、一つになれると思います。僕も子どもの気持ちなんてわからないと悩んでいたときのほうが、意外に子どもに受け入れられたりすることがありました。下手にわかったふりなどしても、うわべだけのものはすぐにばれてしまいます。自分の生まれた町のことを考えるということは、最終的には自分を考えることにつながり、自分が何をすべきかという問いにたどりつきます。自分ひとりでできる可能性から行動してみることが、実は最短距離であり、自分が変われば全てが変わるという大きな取り組みの第一歩になるのではないかと思います。

—どうもありがとうございました。

## 特集『沖縄から東ティモールに何ができるか』中

### 国の担い手とともに—東ティモール復興の現状—

昨年10月から2ヶ月間、OPAC プロジェクトマネージャーの渡辺和雄が東ティモール調査に行った。OPACは平和再建の一環として、元兵士の社会復帰支援を東ティモールで行おうと考えている。インドネシア軍が東ティモールに侵攻してから24年間、山岳地帯でゲリラ戦をたたかってきた元独立派兵に対してどんな支援ができるか調査してきた。

OPACプロジェクトマネージャー  
渡辺 和雄

この国の大統領自身が独立派軍を率いていたこともあり、元独立派兵の処遇に心を砕いているのは、実際にOPAC視察団が大統領と謁見した際によくわかった。また、大統領としては国の内外に対して、元独立派兵の社会復帰事業にとりくんでいる姿勢を示す必要もあるのだらうと思えた。

24年もの間、戦闘に従事し、手に職もなく、財産もほとんどなく、多くは読み書きもできない。そんな彼らに「さあ、戦いは終わり、独立を勝ちとった皆さん、今後の人生のため、家族のために生活のかてを得るお手伝いをします」と私が言ったところで相手にされるのか、とも思ったが、意外に素直に応じてくれた。新しい国家ができたものの、何をどうしていいかわからずぼう然としている様子の元兵士もいた。都市に住んでいる人はともかく、地方では職業といえば農業か漁業の第一次産業が主になる。

ゲリラ戦は山の中で戦われたこともあり、元兵士の支援といえば、内陸の山岳地帯に向いがちだが、沿岸部に住む漁民の中にも元兵士がいることを知った。ジャングルの中で戦う兵士と漁民とは発想としては結びつきにくいですが、'99年の住民投票に続く騒乱のあと山を降り、故郷の漁村に戻って漁をして暮らしている人は確かにいた。

砂浜に木材とタン板でかたちばかりの家を建て、軒の下では母親が漁網の手入れをしており、そのまわりには鼻水をたらした子どもが立っている。迎えてくれた元兵士は素朴そのものだった。ほとんどの元兵士がすでに40代後半で子だくさん。沖縄のサバニのような小型ボートで漁をする。漁法は、漁網にブイをつけて流す刺し網漁法だ。自分の舟を持っている人もいれば、何人か共同でもっている人、持っていないので借りてい

る人もいた。持ち舟がない人は、自分の舟をもっていれば誰に気がねなく漁をしたい時にできると一様に言っていた。

沖縄からサバニ造りの職人を呼んで、東ティモールで舟をつくり、それを元兵士に支援すれば沖縄らしいNGOのプロジェクトになるかもしれないと考えている。また、沖縄独自の追い込み漁を東ティモールの漁業に導入できるかもしれない。

現在、OPACでは東ティモールの元兵士の漁民を対象に支援プロジェクトを模索している。



浜辺に戻り、収穫の魚をバケツに移す



漁から帰り、浜辺で待つ人々とともに舟を陸にあげる



刺し網漁法で、漁網にかかった魚はすず

# 行っちゃいました 東ティモール



OPACボランティア  
高島 美奈



ガラム16というタバコがある。インドネシアで生産され、その独特の甘さが売りのタバコである。今でもこの強烈な香りと共に、東ティモールの東の果て、コムビーチでの宴を思い出す。星が降りそそぎ、海風がそよぎ、精一杯のご馳走が並ぶ浜辺のテーブル。そこで差し出されたガラム16。風が吹く度に消える蝋燭の灯りをたよりに、かの地での恋人マロとその家族の顔を求めた。甘い記憶が、このタバコの香りと共によみがえる。

## 国境が開いた

2002年8月、私は東ティモールを目指した。当時バックパッカーだった私は、かばんひとつでアジアを旅して廻るヒッピー生活をしてきた。気がむいた時に、気の合う仲間と、気がむいた処へ…香港に始まった旅は、中国を経て東南アジアへ、海を渡り、バリ島へ至った。その頃、東ティモールの国境が開かれたという噂を聞いた。21世紀最初の独立国、未だ地図上に名前が存在しない国——こんな刺激的な国へ入れるとは、まさに旅人ヲウリに尽きる。東ティモールに関する知識などはまるで無かったし、かつて注目したことすら無かった。それでも、たった3ヶ月前に独立を果たしたという事実だけが、妙な切迫感をもって私を襲った。見てみたい、単純にそう思った。知識は浅はかなけれど、この国の「今」をこの目で見たい、そう思った。果たしてそこにあるのは、影なのか、光なのか。初めて目にするティモール人たちのカリビアンを思わせる褐色の肌と潤んだ瞳、言葉を失うほどの海の青さ、それと溶け合い、その境目すら見えない澄んだ空——東ティモールに降り立ち、一瞬にしてその光に包まれたかのようだった。ここがかつて、独立を勝ち得るために大量の血を流し、そしてその未来をも危ぶまれる国なのだろうか。

## であい

到着後の行く当ては決まっていない。これまでどの土地でもそうしてきたように、街をふらつき、すれ違う人に道を尋ね、その日の寝床を探す。翌日また同じことを繰り返し、いい場所が見つかれば移動する。そうすることで、街とそこに住む人を自分の肌で感じるのだ。首都デシリでまず出会ったもの、それはダイビングショップだった。オーストラリア人のボスと二人のティモール人スタッフのショップに、私は毎日通い、滞在後半は彼らと寝食を共にした。デリリのダイビング人口は多く、ボランティア活動に来ている人、国連職員、記者、各国からの軍人、日本からのPKO要員——さまざまな人種と国が一堂に会した。彼らと見たティモールの海の中、そこは光の渦だった。透明度が30mを超す海、そこに広がる一面のサンゴ礁、360度を魚に囲まれたときの驚きと感動——いつかどこかで読んだ「ティモ

ールの開発を進めれば、バリ島を優に超す観光地となるだろう」という予想、その根拠はこの海の美しさにあるに違いないと私は感じている。デシリでのもう一つの出会いは市場。私がこれまで東南アジアで目にしてきた市場といえば、野菜、魚、果物があふれかえる、喧騒だった。ここで私の見た市場は静寂だった。ガリガリに痩せたきゅうりが2・3本、今にもしほみそうなトマトが5つ、カラカラになったしょうがのかけら…まばらな露店が出している野菜はそれだけだった。それでも、それを当たり前とする人たちに囲まれていると、嘆くこともなければ、飢えない程度の食料がある、それだけで満たされる気にさえなった。メディアを通して誰かに与えられる情報と、自分がその地で一日一日を過して得る情報の間には大きな落差があるように感じる。活字や他人の言葉からでは伝わりきらない何か、それは——一筋の光を見つけると、その光が影の部分をも照らし得るかもしれない——そんな希望である気がする。

## ガラム16

マロというティモール人がダイビングショップにいた。まるで彼が東ティモールの歴史そのものであるかのように、これまでインドネシアやポルトガルを転々として生きてきた。私たちは恋に落ちた。最後の週末をマロと私はコムという村で過ごした。そこは彼が生まれ育った村で、ティモールで一番美しいビーチがある。当時マロの実家には彼の兄夫婦が暮らし、滞在中、心が熱くなるほどのもてなしをしてくれた。自給自足の、決して裕福とはいえない生活をしている彼らが、二晩も連続で獲れたての魚と、自家製の酒で宴を開いてくれた。夜が更け、波の音が近づく頃、主人がガラム16というタバコを出してくれた。主人の話によると、最後につく数字は、そのタバコの強さを表しているという。8、12と続き、16はガラムの中でも最高級品とされる。東ティモールでの入手は困難で、主人はインドネシアへ行ったときに買ったのを今でも大切に残しているという。そんな貴重なタバコを、初めて訪れた客人である私に差し出してくれたことに、痛いほどの感動が走った。熱くなった喉元にゆっくりとガラムを吸い込み、その甘さに酔いしれた。強烈な甘い香りを吐き出しながら主人が言った言葉を今でも思い出す。「次はクリスマスの時期に来るといい。新しく家も建っているし、もっと盛大な料理でもてなそう。必ず、来てください。あなたの帰りを待っています。」片言の英語を交えながら、熱く語る彼の潤んだ瞳が、小さな灯りの向こうに見えた。

現在様々な角度から意見が交わされる中、一体何が本当のティモールの姿なのだろう、と思う。私が目にしたティモール、それは永遠とも思われる日常の繰り返しであり、異邦人の私にはそこに絶え間ない光の連続がみえた気がする。

## 東アジアの奇跡

OPAC英国支局長  
英国ウォーリック大学大学院国際関係修士課程在籍  
高山 由美子

クラス名：East Asian Development Model (東アジアの開発モデル)

この授業は、1950年代からこれまで急速な経済成長を遂げてきた東(南)アジア諸国の発展の軌跡をケーススタディの形で概観します。

世界における開発経済戦略アプローチは大きく分けて2つあります。マルクス主義の影響の下、ラテンアメリカの経験から生まれた「構造主義」アプローチは40年代後半から60年代前半の主流で、南の経済は北の経済に構造的に依存しているという南北史観の提唱者です。このアプローチの開発戦略が「輸入代替工業化」といわれるもので、国内の消費に頼った国内生産を頼りに一国の経済を成り立たせていく手法です。しかし、国内市場の限界がネックとなって、この戦略は行き詰まり、「新古典派」と呼ばれるリベラルなアプローチが主流となります。新古典派は構造主義とは正反対に、輸出による経済成長いわゆる「輸出志向工業化」を支持し、市場原理を尊重して国家による干渉を最小限に押さえるべきと主張しました。

東(南)アジアの経済成長は、実はこの2つのどちらにも当てはまりません。輸出志向工業化を採用した点は共通していますが、極度の政府干渉主義、官僚主導型の国が殆どでリベラルの提唱する小さな政府、自由貿易とは程遠いのが実状でした。しかし、各国の政策についてはまさに国によって時代によって千差万別で、1国の経験が他国に適用できるとは到底いえません。

世界銀行は1993年に「東アジアの奇跡」という報告書の中で、1つの成長モデルを構築するのは難しいとしながらも共通点をまとめています。主な点として、1. 基礎教育の重視、2. 市場経済の尊重、3. 政府のリードがあげられています。つまり、市場経済と国家の役割の相互補完性、経済発展と人間的発展に深いつながりがあることを示唆したわけです。残念ながら、その後のアジア危機や日本の経済低迷によって東アジアの奇跡はもはやあてにならないとする見解が勢いを得ているようですが、人間的発展アプローチが主流にある現在の開発学において、東アジアの経験が貴重な示唆を与えてくれることに変わりはないでしょう。

## 【参考文献】

- Haggard, Stephan. *Pathways from the Periphery*  
:The Politics of Growth in the Newly Industrializing Countries  
Oxford, Cornell University Press, 1990.
- World Bank, *The East Asian Miracle*  
:Economic Growth and Public Policy  
(World Bank Policy Research Reports),  
Oxford, University Press for / World Bank, 1993.

## キーワード 安全保障講座 ④

## [ミサイル防衛]

Missile Defense/MD

OPAC 研究員  
成瀬 志津子



2003年も終わりに近づいた12月、日本政府はミサイル防衛 (MD) システムの導入を決定した。地上配備型の先進型パトリオット3 (PAC3) とイージス艦に搭載する海上配備型のスタンダードミサイル3 (SM3) を購入する。'98年の北朝鮮によるテポドン発射が日本人に弾道ミサイルの脅威を実感させ、MD構想に対して慎重だった政府の態度を変える決定的要因となった。

当時のニュースを覚えている人は、あの時脚光を浴びていた「戦域ミサイル防衛 (TMD)」なる用語が姿を消し、最近ではもっぱら「MD」に統一されていることにお気づきだろう。この変化は、MDの歴史的変遷を反映している。なかなか興味深いので、ここで触れてみたい。

米ソ冷戦下、両国は核による報復攻撃への脆弱性を確認し合うことで相互の攻撃を抑止する「相互確証破壊」と呼ばれる戦略をとった。その戦略を具体化した1例が、1972年に米ソ間で締結された弾道弾迎撃ミサイル制限条約 (ABM 制限条約) だ。その後、現在のMDの原点とも言われる「戦略防衛構想 (SDI)」が、1983年レーガン大統領により提唱された。別名スターウォーズとも呼ばれた代物である。

現ブッシュ政権が誕生するまで、MDは米国本土を防衛する本土ミサイル防衛 (NMD) と、同盟国や駐留米軍を防衛する戦域ミサイル防衛 (TMD) とに分けられていた。その理由は、ABM 制限条約がNMDの配備を禁止していたためだと考えられる。しかし、ブッシュ政権は、米国のMD構想の障害となるABM 制限条約を冷戦時代の遺物と唱えて破棄し、NMDとTMDの区別をなくして一体化した。日本での呼称の変化は、実は米国のこういった事情を反映させた結果なのだ。

私たちの住む北東アジアは、朝鮮半島問題、中台問題、未解決の領土問題をはじめ、まだ多くの不安定要素を抱えている。日本のMD導入が、脆弱な北東アジアのパワーバランスにどんな影響をもたらすのか、また今後地域的な安全保障の枠組みを模索する中で、日本のMDはどう位置付けられるべきなのか。地域機構設立も視野に入れた長期的なビジョンと包括的な視点で自国の安全保障を検証していく姿勢が求められている。

## ❖ OPACのホームページ快調です。

カウンターのヒット数が4000件を超えた。  
わたしたちは、日々増えていくヒット数を目にして「一体、誰がみているの?」「見ている人を見たい」などと話し合っている。「やっと4000件突破しました」といったら、「そう、うち、1日2万件だから」といわれて、絶句したこともあった。亀のような歩みでも、いいじゃないか。わたしたちは、毎日歩みつづける。何があっても、歩みをやめない。

URL [www.namcle.com/opac](http://www.namcle.com/opac)

## サバイバル 軍事知識①

OPAC 研究員  
仲村 京子



最近のイラク戦争に関する報道で、米軍や自衛隊の編成や武器名など、軍事用語を頻繁に耳にするようになった。また、今回のアフガニスタンやイラクのように、戦闘の最中でも援助機関の民間人が人道支援を行うことが多くなってきたため、現場で活動する国連や NGO も、各国の軍隊と連携・調整を含めた協力を行う必要性が出てきている。そこで、軍事に関する基礎的な知識があれば、イラク情勢など現代の国際情勢をより深く理解できるのではないかと考え、軍事の基礎知識をシリーズで取り上げていく。

### “Company” って会社のこと?

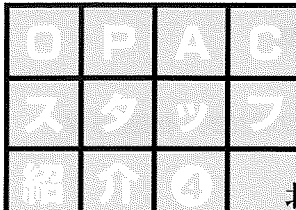
Company という単語を聞いて、最初に思いつく和訳は何だろう? 「会社」と答える人が多いにちがいない。しかし、軍事用語では、これを 120 人規模の戦闘単位である「中隊」という意味で用いる。また、ベトナム戦争下の兵士の姿を描いた『プラトーン』という映画があるが、そのタイトルは米陸軍の戦闘単位である Platoon (小隊) からとられている。

この構成単位は、各国の軍隊によって人数や保有装備も変わってくるが、一般の目安として、小さい順に、分隊 (Squad) 約 10 人、小隊 (Platoon) 約 30～40 人、中隊 (Company) 約 120 人、大隊 (Battalion) 約 400～500 人、連隊 (Regiment) 約 2000 人、旅団 (Brigade) 約 4000～5000 人、師団 (Division) 約 1 万～1 万 5,000 人に分かれる。

たとえば、イラクの状況をみてみると、2003 年 12 月現在、米軍はイラクに 4 個師団、17 個旅団の 13 万人を駐留させ、今後は 3 個師団、13 個旅団の 10 万 5,000 人規模に削減する予定である。在沖米軍も無関係ではなく、在沖海兵隊からは、現在 4 個ある歩兵大隊のうち、3 個歩兵大隊にヘリ部隊を含めた計約 3,000 人が近くイラクに派兵される予定である。

日本からは、陸上自衛隊が約 550 人、海上自衛隊が約 300 人、航空自衛隊が約 200 人、計約 1,000 人を 4 月までに派遣する。陸自のイラク派遣本隊は、上記の単位では大隊規模より若干小さい「群」と呼ばれ、そのなかに中隊未満の施設隊や給水隊が含まれる。この派遣規模は、参加 38 カ国中 9 番目になる見込みである (2004 年 1 月 27 日現在)。

国連 PKO の場合には、各国は大隊単位で部隊を派遣することが多く、たとえば、孟加拉国大隊 (Bangladesh Battalion) であれば BANBATT [バンバット] というように呼ばれる。大隊以下で派遣される場合には、その部隊は他国の大隊の一部に組み込まれることになる。



北川 雄一朗さん



大阪大学大学院  
国際公共政策研究科  
博士前期課程 2 年

インターンを決意したのは、大学院試験に合格したころからであった。日米安保体制に興味のあった私は、沖縄の現状を自分の目で見て、耳で聞き、肌で感じるというプロセスを経ることなく、机上の勉強だけで「日米安保体制の重要性」や「沖縄の地政学的・戦略的重要性」を人前で言及することに強い違和感を抱くようになっていた。

また、国際政治を学ぶものとして基地問題への関心が一番高かったが、高校時代に自転車で沖縄本島一周旅行をした私には、内地と違う沖縄の文化や慣習にも興味があった。つまり、ありのままの沖縄を知りたい、沖縄問題を少しでも理解したいという一種の使命感のようなものを抱いていた。しかも、滞在中、実務経験を積みながら沖縄問題を考えたいと思い、指導教授に相談した。教授は迷うことなく上杉さんを紹介し、夏休みの一ヶ月半、OPAC でインターンをする機会を得た。

OPAC で私に与えられた最も大切な仕事は、委託研究のレポートをまとめることであった。本土復帰 30 周年という節目に、沖縄県民世論が基地問題や自衛隊、本土との経済格差などの諸問題について、どのような意識の変遷をたどったのかをメディアの世論調査を中心に集約し、分析することであった。これが滞在中の一番の成果であり、最も達成感を味わうことができた仕事であった。

ただ、分析する過程では頭を抱える日が続いた。県民ではない私が、県民意識を分析することに戸惑いがあった。もちろん、沖縄県民でないからこそ客観性を生み出せるともいえる。しかし、分析を進めていく過程で、「これが本当に県民意識といえるのだろうか」と悩み苦しんだ。県内の学生や研究者の方々、また地元メディアの方々のご意見も伺いながら、分析結果をまとめた。

このレポートは悩んだ甲斐あり、私にとって有意義のものであった。それは、内地に住む者として最も理解しななければならない、また私を沖縄に向かわせた根幹ともいえるナイチャーとウチナンチューの心理的グレイゾーンをこの研究を通じて垣間見ることができたと考えるからである。

## Book Review

篠田 英朗

『平和構築と法の支配—国際平和活動の理論的・機能的分析』  
創文社 2003年

本書は第3回大佛次郎論壇賞を受賞した。平和構築という現代の国際社会が抱える課題に、「法の支配」という切り口で正面から挑んでいるのが本書だ。我が国では、平和構築に関して、ようやく理論的に整理を始めたばかりで、類書が少ないなか、本書は学術書として極めて貴重な一冊だ。さらに、平和構築の現場で、選挙支援や司法制度整備などに取り組む専門家にとっても参考になる。

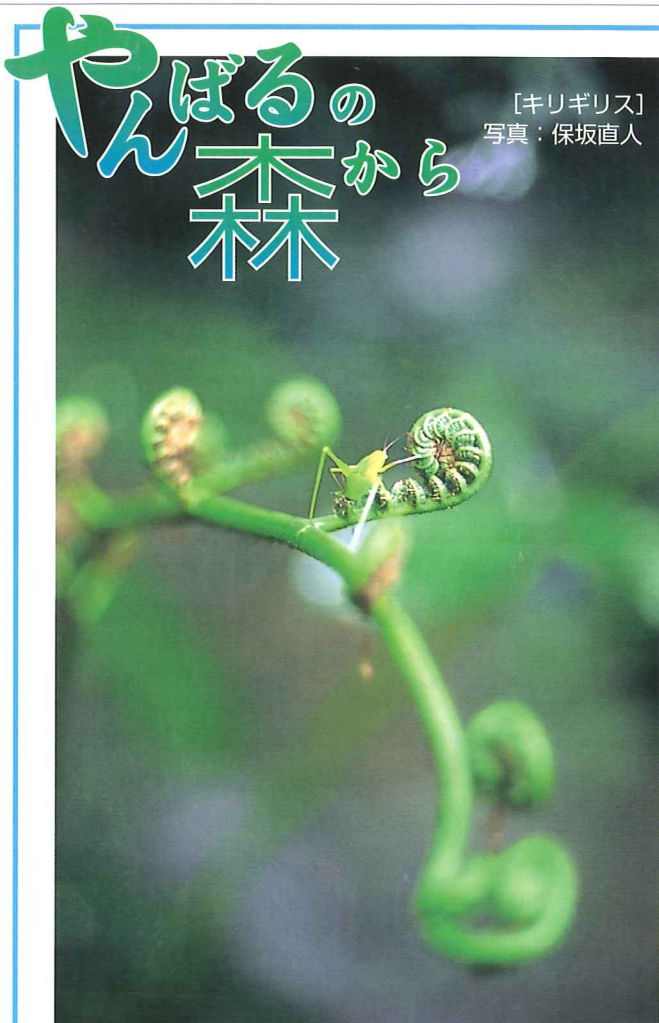
平和構築において最も重要な点は、「法の支配」に基づく社会作りを進め、暴力に拠らない紛争解決のメカニズムを確立することである。通常は、「正義と平和」といった対峙でとらえられる問題を、著者は「司法と平和」という視点で議論し、司法を個人の罪の追及、平和を社会の問題ととらえる。また、和平合意と紛争成熟度の概念をリンクさせ、未熟な段階での和平合意は平和構築の害となるといった論は説得力がある。和平プロセスの流れを、和平交渉→和平合意→平和構築と時系列的に把握するだけでなく、和平合意がない段階で進められた平和構築に関する分析も行っており大変興味深い。

本書では、平和構築との関連で「選挙」も論じているが、選挙を「平和構築のプロセス」に正統性を与えるものと位置づけている。OPACの活動の一つに国際選挙監視があるが、本書では、短期の国際選挙監視員の存在が悪影響を及ぼすという指摘もあり、今後の活動の参考にしたい。

### 著者から一言

このたび拙著は大佛次郎賞を受賞する名誉を得ましたが、類書がない、という評価については、多分に幸運がありました。たとえば上杉事務局長が準備されている本が先に出ていたら、私の本の印象も薄れたでしょう。

平和構築の問題は、日本では研究が未発達です。OPACの方々と協力して、議論を深めていけたらと思います。



【キリギリス】  
写真：保坂直人

道標は  
いつも  
初めと  
書いてある  
平野直人

## OPAC 掲示板

### 安全保障研究会

「日本人の脅威意識」村井友秀(防衛大学校教授)  
「戦後日本の平和主義」宮下明聡(東京国際大学助教授)  
2/2(月) 18:30-20:30  
場所:アルテビル那覇(久茂地小学校裏)2階会議室

### 公開セミナーと交流会「アフガンと沖縄」

アフガン青年によるアフガニスタンお国柄紹介  
2/11(水)・祝日 14:00~  
場所:JICA沖縄国際センター・にらいホール

### 安全保障研究会

「平和と安全保障の概念—構造的暴力や人間の安全保障  
といった概念の意義」  
松尾雅嗣(広島大学平和科学研究センター教授)  
2/25(水) 18:30-20:30  
場所:アルテビル那覇(久茂地小学校裏)2階会議室

編	集
後	記

10年以上も前のこと。国際性とは何なのか考えていた時期があった。国際人、国際社会という言葉が流行していた80年代の終わりだった。何年もしてようやく思いいたったのは、国際性とはより地域的でありうるということだった。世界中、どこにでもあるものだったら珍しくもなんともない。その地域独特のものこそ面白いと思われ、尊ばれるのではないか。

家、服、食事、酒にいたるまで、人間のまわりにあるものは文化であり、目を細めて賞賛されるのは、より地域的でありうるものだ。

大交易時代、14世紀から16世紀にかけて琉球王国の船乗りたちは、おそらく堂々と胸を張ってアジア諸国を渡り歩いていただと思われる。なぜなら、彼らは琉球の文化が独特のものであり、訪れる地域の文化にじゅうぶん伍していけるとわかっていただろうからだ。

わたしたちは、長い伝統文化を持つ国・地域の人間として、世界のどこにいても臆することなく、勇んで生きていきたいものだ。

そして同時に、他の文化も尊重できる人間でありたいものだ。

### 振込み先

銀行：琉球銀行 本店  
口座番号：普通469250  
口座名：沖縄平和協力センター 理事長 金城清